それゆけ，なっとうクラス

高井省司
絵 かみやしん

913

高井省司

それゆけ，なっとうクラス

講談社　1981

230p　22cm（児童文学創作シリーズ）

たかい　しょうじ

それゆけ，なっとうクラス

昭和56年3月20日　第1刷発行

定価980円

著　者　高井省司

発行者　野間惟道

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所　黒柳製本株式会社

© 高井省司　1981　Printed in Japan

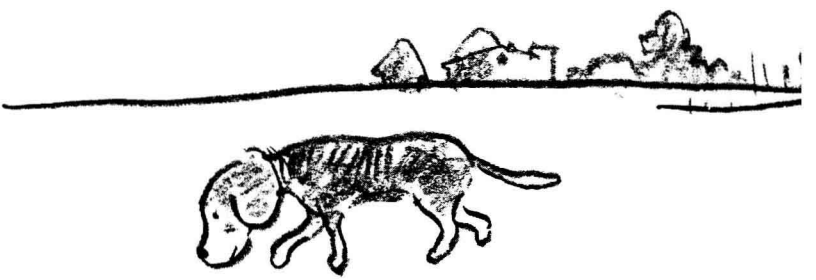
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

それゆけ，なっとうクラス

もくじ

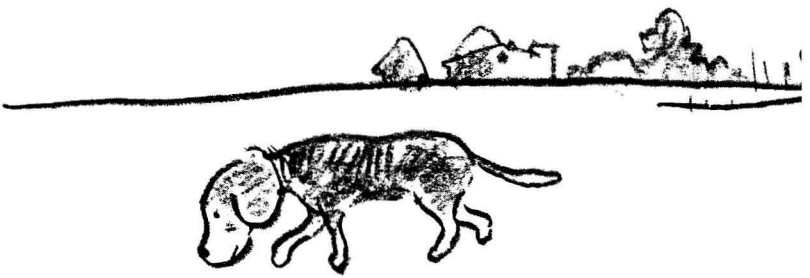
1 東京からきた先生 …… 5
2 おくさん、美人ですか …… 19
3 なみだかん …… 31
4 にゃくてん …… 45
5 先生のまよい …… 60
6 台風の目のように …… 72
7 生きた武者人形大会 …… 83
8 まさか…… …… 97
9 ひとりになりたい …… 109
10 東京まで十万円 …… 120
11 光った目 …… 132

12 かでぱじにする ―― 145
13 なっとうの神さま ―― 158
14 もう一つのわけ ―― 170
15 草ぶえ ―― 186
16 なっとうクラスめざして ―― 201
17 なっとうノート ―― 2[illegible]
18 おれたちなっとうクラスだ ―― 223



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

12 かでぱじにする ―― 145
13 なっとうの神(かみ)さま ―― 158
14 もう一つのわけ ―― 170
15 草(くさ)ぶえ ―― 186
16 なっとうクラスめざして ―― 201
17 なっとうノート ―― 2.
18 おれたちなっとうクラスだ ―― 223



1　東京からきた先生

きょうは四月四日。新しい先生をおむかえする「新任式」のある日です。

ここは、奥羽山脈のふもとにある小さな学校。まわりには、くたびれた顔した雪が、まだまだのこっています。

四年生の教室では、みんな、日がよくあたる南がわのまどべにあつまって、よくうごくサッちゃんの口を見つめています。

「ふたりかわってくるうちのひとりは、東京からくる先生だとよ。東京からだどお！」

「東京」に力をいれて話すサッちゃんですが、だれもしんじようとはしません。

「あほう！　こんな山の学校さ、わざわざ東京からくるってかあ？」

「んだって、ほんとだもん。」

「おめえ、そんなことといって、おらとこかつぐつもりだべども、四月一日なのおわったどお。」

「かついでなんかいねえよ。おら、この耳でちゃあんときいてきたもの。」

自信たっぷりのサッちゃんです。

サッちゃんことサチ子の家は、とこやさんです。村のとこやさんには、いろんな人がいろんなうわさをもってくるので、まるで村のニュースセンターみたいになっています。だからサチ子は「アンテナサッちゃん」とよばれているのです。

ちょっぴり色が黒くてずんぐりしているサッちゃんは、すらりとせいの高いアンテナとはまるでちがいますが、なんといってもクラスいちばんの早耳ですから、みんなは、とてもちょうほうがっています。

そのサッちゃんがむねをはっていうのですから、まずまちがいはないでしょう。

「その先生、男か？　女かあ？」

洋一がせきこんでききました。

洋一たちを三年までうけもってくれた女の先生は、町の学校にかわっていったので、受

け持ちがかわることはまちがいありません。もしかしたら、新しくくる先生かもしれません。だから、その先生が男か女か、わかいかわかくないか……ということは、大問題なのです。

「もちろん、男の先生。」

「ふうーん。」

「それによ……。」

サッちゃんはひくい声でいって、ぐるっとみんなを見まわしました。つられてみんなは、かめの子のようにぐうっと首をのばしました。

「はやくいえよう。」

吾郎がせきたてます。

「その先生、しんこんほやほやだとよ。」

とたんに「うわあ。」と歓声があがり、みんないっしょにとびあがったので、古い木造の校舎はぐらっとゆれました。

「その先生、おらたちの受け持ちになるかもしれねどお。」

とつぜん、目玉のせんちゃんが、大きな目をますます大きくしていいました。

目玉のせんちゃんとは、森川泉のことです。男みたいな名まえですが、女の子です。泉という名はどうもよびにくいというので、泉ちゃんとよんでいますが、このせんちゃん、すごく大きな目玉をもっているので、みんなから「目玉のせんちゃん」とのニックネームをたてまつられているのです。

あまりありがたいことではありませんが、せんちゃんは、ちっとも気にしていません。

せいは中くらいです。ちょっぴりふとっていて、まるい顔をいつもにこにこさせながら、みんなのせわをよくやいてくれるので、クラスの人気者です。

そのせんちゃんが、

「受け持ちになるかもしれねどお。」

なんていったものですから、みんなも、なんとなくそうなるような気がしてきました。

——東京からくるわかい男の先生が受け持ちになったら……。

そう思っただけで、もうわくわくしてきます。

「うわあ、すてきだなや。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まゆ子など、もうきめてしまって、むねをふくらませました。
ホー、ホケキョ、ケキョ、ホー、ケキョ。
うぐいすが、春のたよりを、うら山まではこんできてくれました。
まだ雪がのこっているとはいえ、春はすぐとなりまできています。
ホー、ホケキョ。
春よ、はやくこい。とんでこい。

チャイムが鳴って、全校のみんなが体操場にあつまりました。みんなといっても、たったの八十人です。

入学式はまだですから、一年生だけは学校にきていません。二年生十六人、三年生十九人、四年生十七人、五年生十人、六年生十八人、あわせて八十人です。

このうち、五年生だけがとくに少ないのは、「ひのえうま年」の生まれだからです。六十年に一回くる「ひのえうま」の年にうまれる女の子は、大きくなってからあばれる、とのいいつたえがあるので、この年にはなるべく子どもをうまないようにしているのです。

カタッ、カタッ、カタッ。

体操場につながっているろうかのおくから、校長先生のくつ音がきこえてきました。新しいふたりの先生を案内してきたのでしょう。みんなはおしゃべりをやめ、首をすうっとのばして、あひるの子みたいに入り口のほうを見ました。

校長先生のあとには、せいが小さくころころふとって、めがねをかけたおばさんのような先生がつづきました。

「ありゃ、としょり（年とった）のどんぐりこだあ。」

よくじょうだんをいってわらわせる洋一がいいました。洋一は小さい声でいったつもりでしたが、あたりがしずかだったので、まわりの人たちにきこえてしまいました。くすくすわらう人もいます。

しらが頭の教頭先生が、めがねごしにぎょろりとにらんでから、右の人さし指で口をおさえてみせました。

女の先生のあとはわかい男の先生です。せいが高くてハンサムです。この人が、東京からきた、しんこんの先生なのでしょう。

みんなの目がじいっとそそがれました。

いよいよ新任式です。

校長先生がふたりをしょうかいしました。そのあと女の先生のあいさつ、つづいて男の先生です。

「ただいま、校長先生からごしょうかいいただいた倉橋です。ぼくのうまれたところはとなりの千畑村ですから、みなさんとおなじわらしっこ（子ども）で育ちました。学校を卒業してからそのまま東京にのこり、この三月まで東京の小学校につとめていました。しかし、ふるさと秋田がなつかしくてがまんがならず、とうとう帰ってきたのです。どうぞよろしくおねがいします。」

そういって、ていねいにおじぎをしました。

――倉橋先生なんて、めずらしい名まえだこと。

せんちゃんはひとりでうなずいてから、く、ら、は、し、と、口の中でそっとつぶやいてみました。

「きょうからみなさんとお友だちになるのですから、なかまにいれていただくために、二

つだけお話します。」

——なんの話だべ？

みんなの目が先生に集中しました。

「はじめは、ぼくのニックネームのしょうかいです。」

——あれえ……自分のニックネームをおしえるなんて、まんち（まあ）かわった先生だこと。

だれもがそう思って、気持ちをほぐしました。

「ぼくが赤んぼうだったころの話です。ぼくのおじさんが、ぼくのことを、ベビーベビーとよんでかわいがっていたそうです。」

「……」

「ところが、いつのまにかベビーがベベにかわり、さらにかわってベンベとよばれるようになりました。」

——ベンベかあ。おもしろいこと。

「ぼくが学校へはいるようになっても、友だちは、『やい、ベンベ、ベンベ。』とよぶので

す。いまになっても、やっぱりベンベです。」

あちこちでくすくすわらっています。

「東京の学校ではベンベ先生とよばれていました。」

くすくすが、ほんとのわらい声になってしまいました。

「この学校でも、そのうちきっとわかるだろうと思って、ぼくのほうからさきにしょうかいすることにします。」

——ようし、おらたちもベンベ先生とよぶべ。

洋一は、もうきめてしまいました。

「もう一つは、まじめな話です。」

——こんどは、なんの話だべ？

みんな聞き耳をたてました。

「ぼくが小学校六年のとき、京野という先生にならいました。京野先生は、学校を卒業したての、わかくてぱりぱりの男の先生です。とてもねっしんな先生でしたが、冬になると、雪道をはだしで走らせるのです。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com